



坪田義治著

子供の

四



隆二書

新刊版

昭和十三年八月七日印刷
昭和十三年八月十一日發行

定價貳圓貳拾錢
郵送料拾四錢

著者

坪田讓治

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地

印刷所

富士印刷株式會社

東京市小石川區西江戶川町

季 四 の 供 子

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町

電話牛込

(長)

振替東京
八〇八番

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

裝幀・插畫

小
穴
隆
一

序

「子供の四季」の上梓は私の心にあたらしい感激を覚えさせる。この作品が坪田讓治の文學に頂點をつくるものであらうといふ意見は新聞に發表されてゐる頃から噂されてゐたが、此處に多少の解説を加へればその頂點は子供の世界と大人の世界とがおのづからにしてぶつかつたところにあるとも言へよう。眼に見えないかたちで斬り結ぶこの二つの感情が一つの流れに溶けてゆくすがたほど莊嚴なものはあるまい。この二つの世界が注いで童話となり、溢れて小説となる。しかし、今や、坪田讓治の文學の道において二つの流れは到底結びつくことのできないほど別個の性質を明かにしてきた。相離れ相遠ざかるべく運命づけられた二つの感情があたらしい方向において一致しようとしてゐるのである。「子供の四季」が子

供の眼をもつて見た大人の世界でもなければ、さうかといつて大人の感情によつて把握した子供の世界でもなく、不斷に、そして永遠に伸びてゆく生命の渾然たるかたちであるといふことの意味が此處に初めて理解されるであらう。最近の十餘年間、この作者ほど閑かにして烈しき友情を私に示してくれた人は尠い。崎嶇間關たる世路の難、文學の難をつぶさになめてやうやく今日の風格に達した坪田讓治を思ふごとに私は文學に志をつなぐことのありがたさに心をうたれる。何時であつたか何氣なく讀み捨てたアンドレイ・ジイドの講演筆記の中に、フイリツプに言及した一節があつた。(フイリツプ追悼會の席上における講演であつたやうに思ふ)「フイリツプに會ふと自分の大きいことが恥かしくてならなかつた」——といふ意味の言葉であるが、この感謝はそのまゝ坪田君にあてはめることにおいて甚だ快適の思ひをふかくさせる。誰も彼も坪田君に會つた人たちは、風采が立派であれば立派でありすぎることが、そして態度が堂々としてゐれば堂々としすぎ

てゐることが恥かしくてたまらなくなるであらう。坪田君は自然に託しきつた姿の中に闘志の高邁さをとかしこんでゐるとも言へるが、しかしその飄々落々たる境地は高邁といふ言葉さへも虚飾にみちみちてゐると思はれるほど佻しく和かである。今日、ふと昔の日記をひろげてみるとかういふ一節があつた。「×月×日、坪田君を訪問。牛肉の御馳走になり、酒興やうやく来るものごとし。久し振りにて坪田君、昂然としてゲーテを論ず。興に乗じて西鶴を語る。その高邁なること鳥羽僧正の繪を見るがごとし。云々」

ひとたび彼の言葉によつて語られるといかなる人物の顔もことごとく慈眼にあふれておのれの感情を持ちあつかひかねてゐるやうに見えてくる。私は坪田譲治の存在が日本文學にとつて一つの誇であるといつても過言ではないと考へてゐる。昔は、「痩せ蛙まけるな一茶此處にあり」と、思ひを古人の句に託して彼の窮乏を慰めたことがあるが、今や文學の上において彼が一茶、私が痩せ蛙であるこ

とは疑ふべくもあるまい。彼の送つてくれた手紙の中に「——幼年この道に花、青春この道に鳥、中年風雪の裡、白髪果して如何」といふ言葉があつた。子供の四季が暗示するものは人生の四季である。十年の友情もまた一夢のうちに過ぎたりといふべく、私は彼の高著に一文を送るの日を迎へたことを皇天に感謝しなければなるまい。

昭和十三年新秋

尾 崎 士 郎

子供の四季 目次

子供の四季

坪
田
讓
治

春



「氣を付けえツ。前へーおいッ。」

子供達は三平の家の前門で列び、三平の號令で出發した。銀チャンが先頭でラツパを吹いた。四月中ば、朝七時、方々の山の上の畑には桃の花が咲いてゐた。

「ブツブツブツ——、ブツブツブツ——」

兵隊さんが一人街道を馬でやつて來て、河原の方に下りてつたといふので、今、子供達は勇ましく行進してゆくのである。部隊總員五名、竹の鐵砲をかついだり、腰にさしたり、軍刀のやうに肩にあてゝゐるものもある。

ところで、小川に沿うてやつて來て、大川の土手に登つて見渡すと、河原には五六頭の牛がねそべつて、よだれを垂らしてゐるばかりである。いや／＼、そこからずつと離れた處で、一頭の馬が背中に鞍を乗せたまゝ、俯向いて草を喰つてゐた。大きな茶色の馬である。兵隊さんの姿は見えない。

「突貫——ツ。突込め——ツ。」

兵隊さんはゐなくても、斯うなつては突撃以外にみちはない。ワーツと、みんなは河原に向つて駆け下つた。だけでも、

「あれえツ。」

馬の側まで行つて見たのに、何處にも兵隊さんは見えないのである。キヨロ／＼四方を見渡した末、

「散れえツ。散つてさがせーいッ。」

の號令で、みんなは四方に散つて行つた。一人は草を飛び越え飛び越え、棒を空中に振つて、をどるやうに突進したし、一人は草の頭をやつやつと右や左に打ち据ゑながら突き進んだ。

「へいたいさーん。」

と口に手をあてゝ呼ぶものもあつた。然し兵隊さんは何處からも出て來なかつた。遂に子供達は乗り棄てられてゐる馬の側に集まつて來て、口々に評議をこらした。

「どうも、こりや怪しい。兵隊さんではないんだぞ。」

言ふものがあつた。

「だつて、この馬具を見ろい。將校馬具だぞ。」

三平が言つた。と、これについて、銀ちやんが言つたのである。

「もしかしたら、惡ものがあつてさ、兵隊馬を盗んでさ、それでこゝ迄逃げて來てさ、ねッ、それから河を渡つて、何處か彼方へ行つてしまつたのかも知れないぞう。」

「えゝッ。」

これを聞くと、龜吉は顔色を變へ、もう四邊を見廻して、不安な様子を見せる。

「そんなことあるかい。」

五郎は激しく口をゆがめて、その意見に大に輕蔑の意を表する。銀チヤンに挑戦するのである。然し、

「兎に角もう一度ラツパを吹いて見よう。兵隊さんだつたら、きつと出て来るよ。兵隊さんだもの、ねえ。」

鶴二郎が言つた、そこで銀チャンがラツパを口にあてた。みんなは周圍に輪をつくつた。プツプツプ——、プツプツプ——。これにつれて、頭をゆすつたり、足ぶみをしたり、はては兵隊さんが何處かから出て來はしないかと、グル／＼グル／＼身體を廻したりした。そしてその内みんなは疲れてしまつた。と、

「あれツ。」

銀チャンが首を傾けながら歩き出した。向つてゆく處は、河原の遠い片隅、高い一團の草の茂つた處である。さうだ。そこから一本の長靴の先が見えてゐる。拍車が日に光つてゐる。近くまで駈けて行つた銀チャンは、草の側からぬき足さし足、首を延ばして、草の中を覗き込む。みんなも知らず知らずぬき足さし足、首を延ばして、そちらを注目する。

「おい／＼。」

そこへ駈けて歸つた銀チャンが聲をひそめて報告したのである。

「變なお爺さんがねてゐるんだぞう。ウン／＼呻つてやがるんだぞう。」

河原の隅の草の中で、變なお爺さんがウン／＼呻つてねてゐるといふので、子供達は大聲ぎを始め